



見学に訪れた助産師らに説明する山本さん(中央)＝ぼっこ助産院

人生二毛作

double cropping Life

「生活スタイルは変わって随分楽になったが、子育ては昔と変わらない。変わったといえば、手づくりの布おむつが既製の紙おむつに変わったくらい。若いお母さんの中には、子育ての不安や苦労についていけない人がいる。それをサポートするのが私たちの役目。ゆりかごから老後まで、みんなが集える施設をつくるのが夢だった」

NPO法人いのちの応援舎理事長の山本文子さん。今年二月、元助産師・看護職の仲間とともに「ぼっこ助産院を開所した。『ぼっこ』とは『日なたぼっこ』から命名したもので、人間が気楽に集まれる場所とい

しぼんでたまるが！



挑戦記

その36 ゆりかごから老後まで

いのちの応援舎理事長 山本文子さん(62) 高松市



「私を支えてくれる多くのスタッフのためにも頑張ります」と語る山本文子さん＝ぼっこ助産院

出産の感動を忘れずに

意味。山本さんは、元NTT高松病院の助産師。とり上げた赤ちゃんは二人にのぼる。「初めて赤ちゃんを出産して感動の涙を流すお母さん。一方で望まぬ妊娠や性感染症などの悲劇を見て

きた。いのちの大切さが身にしみ込んでいる」と現職時代を振り返る。同病院を五十三歳で退職、二年間、岡山市内の医療に勤めた。一九九九年、源平の古戦場・屋島を北側に望む自宅マンションを拠

点に「いのちの応援舎」を立ち上げた。活動は現職時代から続いていた講演が中心。全国をまたに年間二百回ほどこなす。テーマは、健康、性教育、私の生き方などで、そのバックボーンには「いのち」の血が流れている。ユ一モアを交えた歯に衣を着

仕方なく『私の夢』買ってくれませんか、と全国に呼びかけた。すぐ反応があり、約六十人の仲間が賛同してくれ、目標額をクリアできた。うれしかった。

みんなの夢を乗せ、開所した施設は、お産、病後児保育、おやこ広場、お年寄りを対象にした「デイサービス」の四本柱。お産は自然分娩が原則だが、香川大医学部付属病院などの医療機関と連携し、非常時態勢を整えている。

メモ

ぼっこ助産院 安心できる出産・産後の養

生・子育てをサポートする施設。スタッフは助産師、看護師ら約三十人。入院室は5室。フリースタイル出産。家族立ち会い出産。母乳同床が原則。予約制のマタニティサービス(月一土曜日)もある。高松市春日町。電話087(843)80255。

活動は現職時代から続いていた講演が中心。全国をまたに年間二百回ほどこなす。テーマは、健康、性教育、私の生き方などで、そのバックボーンには「いのち」の血が流れている。ユ一モアを交えた歯に衣を着からと銀行には断られた。ア編集室 栗生武志

今春、助産師教育の功績が評価され、村松志保子賞は「命。いのちの応援舎の活動は加速しそうだ(シニア編集室 栗生武志)